

『 神の真実 』

ローマ人への手紙 3章 1～8節

青木 信太郎 牧師

◆ ユダヤ人の特権

今朝の箇所、パウロは「ディアトリベー(対話)」という論法を用いています。自ら問いを掲げてそれに答えるという当時の哲学的論法です。パウロは先ずユダヤ人の明らかな特権、優位性を説明します。【1節】律法と割礼の本質に立てず、罪人であることを認めることが出来ないユダヤ人。ではユダヤ人のすぐれたところは何かあるのだろうか？割礼を施す意味はあるのか？と語り続けます。【2節】「第一に、彼らは神のいろいろなおことばを委ねられている」ことであるとパウロは説明します。ここで“大いにあります”“第一に”とありますが、第二、第三はありません。つまりこの第一の答えだけで十分である。この答えに尽きるということでしょう。ユダヤ人の優れたところ、それは「神の様々なことばを委ねられた民族であるということに尽きる」ということです。これは紛れもない事実です。神様はそのおことばを他の民族には委ねられませんでした。常にユダヤ人、イスラエルの民に語り続け、御言葉を託してくださったのです。ユダヤ人はその歴史において常に神のことばと共に歩んできたのです。これこそがユダヤ人の優位性であり特権です。しかし彼らは御言葉が付与され保持している自らを特別であると誇り続けました。特権にはその責任が必ず伴います。パウロは「委ねられている」と説明しました。単に与えられたのではなく委ねられていると。すなわち、神のことばを広め伝える責任と使命が与えられていることこそ、ユダヤ人の特権であるとパウロは説明したのです。【全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい(マルコ16章15節)】パウロは神のことばを保持するだけでなく委ねられていることを痛感していました。それがユダヤ人の特権であり、責任と使命であることを。

◆ 神は間違ったのか

【3節】神に選ばれ、御言葉が託されているにもかかわらず、ユダヤ人はその特権と責任を十分に果たしていないのではないのか。神のことば・律法が委ねられた彼らはそれを守り行うこともできないばかりか優位性だけを誇り異邦人をさばっている。ユダヤ人として生まれ育ち、割礼を施していれば神の民であると主張している。まるで神を侮っているような彼らユダヤ人の「不真実」によって「神の真実」が無になってしまうのではないのか。彼らを選び御言葉を託された神は間違いを犯したことになるのだろうか。とパウロは問いを掲げます。しかしそれは次の明確な答えを導くためでありました。【4節】彼らユダヤ人の不真実によって、神の真実は無になってしまうのか。パウロはきっぱりと「絶対にそんなことはありません」と答えを導きます。【たとい、すべての人を偽り者としても】は、「ユダヤ人のみならず全ての人々が偽り者、不真実な者であっても」と理解すべきでしょう。そうだとすると【神は真実な方であるとすべきです】とパウロは語るのです。ここで注意すべきは“神を真実な方であるとすべき”ではなくて、“神は真実な方であるとすべき”と語られていることです。不真実な偽り者であるユダヤ人をもってして、神が真実であるか不真実であるかを我々が判断したり定めることが誤りである。そもそも被造物であり、罪人である私たちが、神を真実と判断したり、定めるなどとは全くのお門違いである。神は初めから終わりまで永遠に真実なお方であることを私たちはただただ認めるべきなのであるとパウロは語っているのです。そして、不真実なユダヤ人を選んでその御言葉を託された神は間違いを犯したのかなどと神の真実を疑うよりも、為すべきことがあるのではないかとパウロは【詩篇51篇4節】を引用します。ダビデ王が人妻バテ・シェバを手中に収めるために、その夫ウリヤを戦場に送って殺した罪を預言者ナタンによって指摘された時にダビデが歌った詩篇です。ダビデは自らの

恐ろしい罪を認めて悔やみました。それゆえに「どの様なさばきを宣告されようとも神は正しいお方であり、どの様なさばきが降されようとも神はきよいお方であるのだ」という告白です。私がどんなに醜い罪人であろうとも、どの様なさばきがあろうとも神の真実は変わらないという、神の御前にへりくだる姿勢、罪の悔い改めの詩篇が用いられています。

◆ 愚かな開き直り

パウロは更にディアトリベー(対話形式)を用いて福音理解へと導いて行きます。【5-7節】先の4節、とりわけダビデの詩篇を受ける形でパウロは話しの内容を深めます。「なるほど。ダビデが告白したように、私たちの罪のさばきを宣告し、私たち罪人をさばきに降されることにおいて神の正しさ、聖さ、神様の真実が明らかにされるならば、私たちの不義・不真実が神の義・神の真実を現すことに繋がるのではないだろうか?」「私たちの偽りの罪によって、さばきを降される神様の真実・真理がますます明らかになって神の栄光に繋がるなら、神の真実を現すために敢えて罪を犯そうということになりませんか?」もはや愚かな開き直りのような問いをパウロは敢えて掲げました。なぜでしょうか?【8節】当時のユダヤ人たちはパウロが語る福音を聞いて「彼は、善を現すために、悪をしようではないか」と言っていると避難していました。勿論、パウロはそのようなことは何一つ語っていません。これまで観て来た様に、ユダヤ人も異邦人も皆、神の前に罪人であることを語りました。多くのユダヤ人は異邦人と違い、律法の下に禁欲的で道徳的な生活をしていました。そんな彼らにとってパウロが語る罪の問題は、まるで律法や割礼を重んじてユダヤ人らしく歩むことが足蹴にされていると捉えられたのです。「では、異邦人のような罪人の生活をする事で、神の正しさ、聖さ、真実が明らかになるのか」と開き直りのようにしてパウロが語る福音、キリスト者の群れを非難するのです。パウロが伝えたい罪の悔い改めの信仰義認に当時の多くのユダヤ人は及ばないのです。神の真実を現すために敢えて罪を犯そうなどと、愚かな開き直りの言葉を持って非難しようとする人々についてパウロは【もちろんこのように論じる者どもは当然罪に定められるのです】とハッキリ説明しました。

◆ お勧め

パウロがローマのキリスト者に伝えたい神の真実とは何でしょうか。それは信仰義認に他なりません。【マタイ10章33節】【Ⅱテモテ2章11-13節】「もし彼を否んだなら、彼もまた私たちを否まれる。私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。」もし私たちがイエス様を否定し拒むなら、その裁きのときにイエス様も私たちを否定し拒むと言うのです。今朝の箇所同様、私たちがイエス様を否とするのは私たちの不真実、不誠実ゆえです。そんな私たちをイエス様が否とすることは神の真実であるわけです。しかし私たちはあの裏切りのペテロを思い出さずにはいられません。イエス様が十字架に掛られる直前、大祭司、律法学者らに不当に裁かれ、つばきをかけられ、こぶしで殴られ、平手でビンタされている間、それを遠めで見ていたペテロが「お前も仲間だろ」と疑われたとき、「私は知らない」と三度否定しました。最後は呪いと誓いをかけてイエス様を知らない、「否」と拒んだのです。では、真実なお方であるイエス様はペテロを「否」と拒むのでしょうか。復活のイエス様はペテロに三度続けてこう語りかけてくださいました。【ヨハネの子シモン。あなたはわたしを愛しますか】ペテロは心を痛めながら答えます。【私があなたを愛することは、あなたをご存知です】私には小さくて愚かで不完全な愛しかありませんという告白です。ペテロはイエス様を裏切って否定した罪を悔い改めずにはいられませんでした。イエス様は「わたしの羊を飼いなさい」と云ってペテロを送り出しました。これが「神の真実」です。神の真実とは罪人を悔い改めへと導くのです。神の真実とは罪人の赦しです。神の真実とは愛なのです。私たち罪人を救いへと導くイエス様の十字架に神の真実が明らかにされているのです。そして今、神様はその御言葉を福音を神の真実を私たちキリスト者、教会に委ねてくださっています。その特権と責任を全うする教会でありたいと願わされるのです。